

②D-3 幼児期経験の行動形成に及ぼす効果

お茶の水女子大 浅見千鶴子
○金田 利子

1. 「幼児期は人格形成の基礎」であることは、今や周知のことであるが、しかしヒトの縦断的研究は20年余の歳月を複雑な条件のために、幼児期のいかなる経験がどのように作用し、成熟後のどのような行動にどのような

群	h	m	s
I	+	+	-
II	+	-	-
III	-	-	+
IV	-	+	-
V	-	-	-

機能をもたらしているか、厳密な実験を行なうことはほとんど不可能である。そこで本研究において、成熟の速いシロネズミ（離乳21日、成熟約70日）を用いて、幼児期経験の効果の基礎的実験を試みた。

2. 3. 対象としてシロネズミ38匹（♂21, ♀17）を用い、初期経験の条件

として ①ハンドリング (h) ——手で体を軽くさする (軽刺激) ② 電気ショック (s) ——足に電気格子を通し電撃を与える (痛刺激)。③ 離乳期後も母親と一緒にさせる (m)。以上の3条件を組合わせ5群に分けた (表)。テストとして直線走行路(新しい場への馴れ), と活動竈 (活動量) を用い効果をみた。生後21日から20日間を処置期, 15日間休止期とし, 56日目よりテストを行なった。

活動量についてはグループ間に有意差は認められなかったが, 直線走行反応においては走行時間, 学習成績ともに群間に差があり, これは新しい場面への適応に対応する。ハンドリング処置は適応性を増大させるが, 電気ショックおよび母親を離さない処置は適応性を減少させる結果が得られた。